



Title	ディスカッサント発言1 : 台湾から
Author(s)	李, 文茹
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 27-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68047">https://hdl.handle.net/11094/68047</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ディスカッサント発言1：台湾から

李文茹

2017年1月11日、台湾では2025年までの脱原発を明記した電気事業改正法を国会で可決しましたが、核廃棄物の処理をめぐる問題は依然として解決されていないままです。台湾では低レベル放射性廃棄物は現在、先住民タオ族の居住地でもある蘭嶼という島に貯蔵されています。1997年に台湾電力が自社の原子力発電所から発生した低レベル放射性廃棄物を北朝鮮に輸出し処理する合意に達し、蘭嶼にある一部の廃棄物も北朝鮮に輸出される予定でした。しかしその合意は未履行のままであるため、2013年に北朝鮮から1010万米ドルの違約金を請求されたと報道されています。2017年9月22日、国連の加盟国ではない台湾でも行政院（内閣）は北朝鮮の核開発、ミサイル発射に対する国連安全保障理事会の動きに歩調を合わせる意思を示し、北朝鮮に経済制裁を実施することを発表しましたが、核燃料廃棄物輸出の問題は依然として未解決のままとなっています。

さて、本題に戻りますが、「東アジア」の視座から原爆文学研究の現状と課題について考えるのがこのセッションの主な目的です。川口さんと宇野田さんのご報告は、「日本」もしくは「日本人」という共同体をめぐる想像を揺さぶるための方法としての、広義の原爆文学を提起すると同時に、ナショナル・アイデンティティの助長に利用されがちな歴史的事実としての「原爆」の性格についても示唆に富んだ指摘がなされていたと思います。ここでいうナショナル・アイデンティティの問題には、被爆国としての日本だけでなく、旧日本帝国に支配された経験のある韓国や台湾も含まれます。

台湾の場合についていえば、韓国の場合と同様に、原爆のきのこ雲はアジア太平洋戦争の終結を意味し、日本の植民地支配からの解放の象徴的なシンボルとなっています。とくに1987年に戒厳令が解除されるまで台湾の戦後史は与党だった国民党の中国の戦場における日中戦争の記憶と結びついており、「原爆」は帝国や敗者としての「他者」の歴史として語られてきました。きのこ雲の下に起きた出来事を想像する土壌が長い間貧弱なまま、台湾は戦後史を歩んできましたが、近年、それをめぐる記憶を掘り起こす作業が行われはじめました。2011年に「台湾被爆者の会」が設立され、2012年に『台湾の被爆者たち』（平野伸人監修、長崎新聞社）という本が日本で出版されました。それまで台湾籍の被爆者の存在は台湾社会ではあまり知られていませんでした。なぜ語られなかったのか、あるいは語れなかったのか、検討される必要があるでしょう。

「原爆文学研究の歴史」をめぐって、川口さんのご報告のなかでは、原爆文学をめぐる評論の歴史的な流れが説明されていました。台湾現代文学においては原爆より原子力発電所（以下、原発）のほうが早い時期から注目され、それはちょうど台湾の民主化運動の動きと連動していました。第一原発が稼働したのは1978年で、反原発の言説もその時期から少しずつ登場してきますが、本格化するのは80年代の半ば以降です。「報道文学・記録写真」を特色とする文芸雑誌の『人間』（1985年11月～1989年9月）はその代表例です。この雑誌は原発施設の労働者の被曝問題を取り上げるほか、原爆文学「夏の花」も翻訳掲載したりするのですが、その関心の多くは原発被曝者を含めた労働者問題、あるいは環境問題にあり、広島や長崎における台湾人被爆者の経験が語られることはありませんでした。仮説になりますが、この問題は、『人間』という雑誌が反国民党であると同時に、中国大陸との統一を志向する陳映真（1937～2016）という文学者・知識人によって主宰されていたという複雑な事情も関係しているように思われます。簡単に言えば、いま現在の国民党は批判しなくても、過去の国民党や中国共産党がおこなった抗日戦争の語りについてはうまく問題化することができなかつたのかもしれませんが。日本の戦争責任を語ることは大事ですが、そのことが、台湾において日本の植民地支配をどのように内在的に語るのかという問題をおざなりにさせてしまったとも言えそうです。同じ日本の植民地支配を経験した韓国とも微妙に異なった台湾の「戦後」の問題かもしれません。

また、台湾の場合、原発問題と関わっては、先住民族問題、エスニック・マイノリティの問題が重要です。核廃棄物が貯蔵される島の出身のタオ族の作家シャマン・ラポガンの作品、とくわけ「核」の問題を扱う作品（『大海浮夢』、2014年初出、2017年日本語訳）は、台湾内部における漢民族による先住民族に対する支配の問題を暴露します。また、台湾という枠組を超えて、マーシャル諸島などにおける核実験の被害を被った先住民族（海と共に生きる民族）との間のマイノリティ同士の連帯関係の可能性をも提示しています。さらに言えばそこから「東アジア」という枠組を脱構築する力を見出すこともできるでしょう。既存の枠組を強化するのではなく、それを揺さぶる可能性を見出し、境界を超える多様な対話の可能性を作り出していくことにこそ、原爆文学を再読する意味があるし、今度上梓された『〈原爆〉を読む文化事典』はそれを実践したのものであると考えています。

とりあえず私からのコメントは以上です。